

2019. 4 / 27 [土] - 6 / 9 [日]

## 没後60年 北大路魯山人 古典復興 一現代陶芸をひらくー

北大路魯山人(1883-1959)は、30代の終わりに生来の食に対する関心から「料理の着物」としての作陶に向かいます。その旺盛な活動はまさに「『美』を食す人」。本展では、魯山人ゆかりの名古屋の料亭・八勝館や、質の高いコレクションで知られる世田谷美術館(塩田コレクション)を中心に、魯山人の作品をご紹介します。また、川喜田半泥子、石黒宗麿、荒川豊蔵から八木一夫にいたる同時代の陶芸家たちの作品に加え、彼らが学んだ中国、朝鮮そして日本の古陶磁も併せて展示し、昭和陶芸の豊穡な成果とその源流から未来を見つめます。



《織部間道文相皿(おりべかんどうもんまないたざら)》1953年頃 八勝館蔵

10 / 18 [金] - 11 / 17 [日]

無料

## コレクション展Ⅰ 新収蔵作品を中心に

作品収集は企画、調査・研究、教育普及、保存と並ぶ美術館活動の柱であり、美術館の性格をつくるものでもあります。本展では2017・2018(平成29・30)年度に新しく収蔵された作品を中心にをご紹介します。白木屋専務と藤井達吉との長年の交友を語る岡清蔵氏旧蔵作品をはじめ、日本の近現代美術史を彩る各作家の作品が一堂に会します。油彩から日本画、版画、彫刻、工芸まで、多様性に富む作品群との出会いをお楽しみください。



藤井達吉《椿の翁》1957年頃 卷子(部分)

8 / 10 [土] - 9 / 23 [月・祝]

## 空間に線を引く 一彫刻とデッサン

彫刻家のデッサンは魅力に富んでおり、画家のデッサンにはない美しさがあります。彼らのデッサンは二次元でありながら、三次元とみなす感性のもと描かれています。紙面は空間であり、空間に引かれた線は対象の存在感やものの粗密を表現しているように見えるのです。本展は、橋本平八を起点として、柳原義達や舟越桂、青木野枝など、戦後から現代までに活躍した彫刻家約20名のデッサンと、それに関連する彫刻を展示し、その魅力と創作の秘密にせまるものです。



柳原義達《犬の唄》1970年 三重県立美術館蔵

10 / 18 [金] - 11 / 17 [日]

無料

## 没後100年 服部長七と近代産業遺産

碧南出身で「長七たたき(人造石)」を開発した服部長七(1840-1919)の没後100年を記念した企画展です。長七は三和土を改良した人造石「長七たたき」を開発しました。これは四日市港潮吹き防波堤や神野新田堤防(豊橋市)など、全国各地で築堤、架橋などの大小の土木工事に使われました。本展では、こうした服部長七の事績について、長七が復興に尽力した岩津天満宮(岡崎市)の所蔵品を中心にご覧いただけます。



《服部長七像》 岩津天満宮蔵

12 / 21 [土] - 2020. 2 / 24 [月・祝]

無料

## コレクション展Ⅱ 「人のかたち」をみつめて／片山照子・繁コレクション

古来、「人」は美術表現の中心的な位置を占めてきました。私たちがどこから来たのか、何者であり、何のために生き、どこへ向かうのかは、人間にとっての永遠の問いである故に、「人のかたち」が注目され続けるのでしょう。人物像の描かれぬ作品でも、人間が介在する場を感じさせる時さえあります。本展では所蔵作品の中から、肖像画はもとより、シルエットや影、気配まで、人を示す作品を取り上げます。また本展では片山照子・繁コレクションをまとめて展示し、作品と貴重な文献との魅力的なつながりをご紹介します。



大沼映夫《花の歌》1990年

12 / 21 [土] - 2020. 2 / 24 [月・祝]

無料

## 野村佐紀子展

野村佐紀子(1967-)は、静謐な写真表現で知られる新進気鋭の作家です。これまでに発表された作品の多くは、モデルと長い時間を共にしながら撮影されており、愛の大切さや、打ち解け合っ初めて見られる人々の表情の豊かさを気づかせるものでした。近年は、高齢者のポートレートや、枯れゆく花、空を流れる雲などの写真も発表しています。本展では、野村の代表的な作品と現在の表現を紹介します。



2014年

2019年度 企画展・共催展カレンダー

- 没後60年 北大路魯山人
- 空間に線を引く一彫刻とデッサン
- コレクション展Ⅰ
- 服部長七と近代産業遺産
- コレクション展Ⅱ
- 野村佐紀子展
- 共催展等
- 休館日

